

国際理解教育

～ヒト・モノ・コトを通じた国際理解と交流～

発表者氏名： 手嶋 將博

所属先： 文教大学・教育学部

役職： 准教授



発表要旨：

「国際理解」の究極の目的は「共生」であり、「共生」とは、人間同士のかかわり、人間の生き方、あるいは人間と環境のあるべき姿を示す言葉である。国際理解教育を進めるにあたっては、こうした「共生」を柱にした教育が不可欠であるが、これは、己との共生を基盤にして、他者と関わりつつ、自分の生活を認め、より良い環境を共につくり上げていくことである。こうした学習の基本にあるものは「人間理解」ということであり、学校で普段から行われている、自分を大切に、お互いを尊重し認め合う、といった学びの延長線上にあるといえる。そのため、国際理解教育では、異文化理解や自文化理解、コミュニケーション能力の育成等を通して、新しい価値を基盤にした生活環境（＝「公平」な生活環境）の意識の涵養 といったことをねらいにした「継続的」で「学びあい」に繋がる実践が求められる。



日本とマレーシアにおけるアウトリーチ教材を通じた国際理解教育実践の調査で、2008年8月にマレーシアのテムンゴン・アブドゥル・ラーマン国民小学校を訪問し、日本のアウトリーチ教材に対する意識調査を実施。

具体的な国際理解教育の方法論としては、①「ヒト（人）を通じた国際理解」として、留学生や地域の外国人等との交流などを通しての学び、②「モノ（物）を通じた国際理解」として、日用品や道具などの「五感」を通して触れるモノを通しての学び、③「コト（事柄）を通じた国際理解」として、祭祀や習慣、行事、行動に伴う考え方等の「文化的な異同」を通しての学び、といった3点が挙げられる。本講義では、国際理解教育の実践事例として、国立民族学博物館との連携によって進められて来た、日本の児童・生徒が、普段使っている日用品＝身近な日本文化をアウトリーチ教材として作成し、マレーシアの小・中学生にそれらの教材に実際に触れてもらって、「日本文化」としてどう感じるかを評価してもらうという実践を通じ、児童・生徒の日本文化の再発見、異なる文化を持つ他者への日本文化の発信、モノを通じたマレーシアとの交流による両国の児童・生徒の意識の変化とそこから得られた学習効果などについて紹介・報告する。